

ネットワークボード

『「知的障がい者」について書かれた書籍は、数多くあります。けれども、それらは本当に彼らの本質を表現できているのでしょうか?』そんなインパクトのある書き出しで紹介される「はるはる日記」。この本は、35年の長きにわたって知的障がい者の支援をしてきた奥さんの話を、ライターであるご主人、戸原一男氏が聞き取り、人気イラストレーター伊東ぢゅん子さんとともに、「これまでの福祉本にはなかった切り口で、知的障がい者の魅力を伝えたい」という想いを表現した「マンガ」です。障がいのある人たちのエピソード、支援施設の事業開発、そして現場の支援の在り方など、内容は盛りだくさん。入門書としてもおすすめです! (編集部)



文/戸原一男
絵/伊東ぢゅん子
発行/Kプランニング

こちらからも注文できます!

↓↓↓



『はるはる日記』税・送料込 2000円
ご購入は応援購入サイト「Makuake」
<https://www.makuake.com/project/haruharudiary/>



編集後記



コロナ禍で様々な活動が制約される中、私たちは昨年来、少しずつでもかつての日常を取り戻すために試行錯誤を繰り返してきました。しかし、幾度となく延長される緊急事態宣言と、爆発的に広がっていく感染の状況下、「取り戻す」よりも「新しい形を創る」ことの必要性を改めて感じています。昨年のはじめには「Zoom?なにそれ?」という方も多かったと思いますし、講演会や社員総会をライブ配信するなどということは考えもしませんでした。そういう意味では社会生活は少しずつ適応してきているとも言えますが、やはり障がいのある人たちは置き去られている感否めません。高齢者なども同じかと思いますが、情報ツールを持たない、持てない人たちは以前から「情報弱者」と呼ばれてきました。そしてコロナ禍にあって、その傾向は際立っています。こういう時に必要なのは、スマートフォンでつながるだけではなく、近くの人たちで声を掛け合う、見守り合うこと。そして地域社会には「〇〇警察」のような、監視の目ではなく、真の思いやりの目が求められていると思います。

(みなみやま)